

上野東照宮：唐門

上野東照宮の装飾を施した唐門はメインの建物（社殿）の真正面に立っています。どちらの建物も将軍、徳川家光（1604–1651）が上野東照宮を、東京の北に位置する現在の栃木県にある東照宮の本社である日光東照宮にもっと似たものにするために建て替えさせた 1651 年に建造されました。唐門は 13 世紀に広まり、権威の象徴として用いられることの多かった建築様式である曲線をつけた破風という特徴を備えています。破風の下への入口の左右には金箔に覆われた柱があり、その柱の傍らには複雑な龍の彫刻があります。この彫刻は日本各地の数々の有名な建築物を飾る作品を手がけたと言われる伝説の、そして恐らくは架空の芸術家もしくは芸術家集団、左甚五郎の作とされています。2 頭の龍は昇り龍、降り龍と呼ばれています。下を向いている龍が「昇り」と呼ばれていることにご注目ください。これは、謙虚な人だけが真の偉業を成し遂げることができるという徳川家の戒めを表しています。

内側では、2 匹の龍は、屋根の突き出した部分を支える左の柱と金の扉の間に設置された細かい透かし彫りで表された華やかな鳥によって繋がれています。頭の赤いこの生物は中国の故事に由来する諫鼓鳥です。その故事によると、当時の皇帝は宮殿の門の外に大きな太鼓を置き、政治に不満がある時はその太鼓を叩くように民衆に促したと言います。ところが皇帝が誠に賢明に治政を行ったために、太鼓が叩かれることはなかったそうです。代わりに鳥が太鼓に巣を作り、善政の象徴となりました。この諫鼓鳥は、徳川の治世も神話に登場する中国の皇帝の治世のように平和でありますようにという願いを込めて唐門に加えられました。もう一つ、内側の柱に見られる獅子と牡丹の組み合わせも中国の寓話から想を得たものです。伝説によると、獅子が牡丹の下で眠ることを好むのは、牡丹の花の蜜が寄生虫を追い払ってくれるためで、それがなければ寄生虫が獅子の皮膚に付き、百獣の王を死の危険にさらすということです。